

令和6年度文京区障害者地域自立支援協議会子ども支援専門部会主催研修会
切れ目のない支援を実現するために～教育と福祉の連携と課題～

日時 令和6年7月29日（月）午後2時から午後4時34分まで

場所 文京区民センター3階 会議室3A

<会議次第>

1 開会

2 議題

(1) 話題提供・質疑応答

「教育と福祉が切れ目のない支援を実現するために～文京区の現状と課題～」

(2) グループワーク

3 閉会

<司会>

放課後等デイサービスカリタス翼 向井 崇 部会長

<話題提供者>

教育センター 武田 瑞穂 氏

教育指導課 高橋 拓也 部会員

大塚生活あんしん拠点 北原 隆行 氏

障害者就労支援センター 皆川 譲 氏

<参加者>

教育関係者（区立小学校、中学校教諭、管理職、特別支援学校教諭等）38名

教育センター（スクールワーカー、スクールソーシャルワーカー等）19名

福祉事業所（区内放課後等デイサービス、児童発達支援、相談支援事業所等）29名

その他 12名

総合計 98名

1 開会

向井部会長より挨拶、趣旨説明

2 議題

(1) 話題提供

○ 教育センター

① 教育センターについて説明

② 切れ目のない支援を実現するための課題について説明

- ・ 相談支援事業の役割自体が、まだ知られていないというところで、私たちの役割を十分に理解して連携していただくまでに時間がかかる。

相談支援事業は何をする人か、連携したい目的は、計画相談に学校の視点が欲しいと言うけれどどうしてそれが必要なのか、説明をして納得いただくまでに時間がかかる。

- ・ サービス等利用計画案を作成する際に、関連機関と支援方針や内容、サービスについて、一緒に検討する機会が十分持てていない。お子様やお母様が福祉サービスを使う上で、一緒に方針を立てながらサービス利用計画を作成するが、後から学校や放課後等デイサービスで作成している計画と方針がずれていたり、具体的な支援の手だてが違うことがあって、みんなで集まって、お子様一人のために、みんなで支援の方針を考えていったほうが、よりよいサービスができると日々感じている。

○ 教育指導課

① 文京区立学校の基本情報、特別支援教育にかかわる事業について説明

② 特別支援教育にかかわる成果と課題について説明

- ・ 支援者同士のつながりの難しさは、時間的にも空間的にもある。
- ・ 特別支援学級の中での児童・生徒数の増加が著しい。支援教室に至っては、先生方のクラスの中で運営するのは難しいところも出てくる。
- ・ 児童・生徒の実態の多様化。いろんなことが、家庭内の問題も含めて絡んでいるので、単純にプログラムすればいいというわけではない状況が多く出てきている。障害だけではなく、医療的ケア、アレルギーのお子さんも入ってくるので、気をつけなければいけないことは多々出てきている。
- ・ この会を行う際に、皆さんが一生懸命プロとしてやっていることに対して、批判することは簡単にできる。お互いにプロだという認識を持ってこの会を成立させていただければと願って、協力していければと思っているので、グループワークのときに、

ポジティブな意見をたくさん出していただければと思う。

○ 大塚生活あんしん拠点

① 地域生活支援拠点について説明

② 生活介護や地域生活支援拠点従事期間において感じた「18歳」における切れ目

- ・ 学校教育法と総合支援法の違い、卒業による切替えのときのハード面とマンパワーの違いがすごく大きい。切替えがうまくいかないと、人と環境の相互作用で障害の度合いも変わってくる。
- ・ 総合支援法にも、児童から成人の切替えで切れ目がある。特に放課後等デイサービスは18歳で終了してしまう。障害者施設が16時ぐらいで終わってしまい、ご家庭も困るのでそれに代わる支援をコーディネートしなければいけない事案も起きてくる。短期入所、移動支援や地活センターをうまく組み合わせないと、その家庭が成り立たない。計画相談の切替えもあるので、なおさら大変。
- ・ 制度上、法律上そうせざるを得ないところがあると思うが、18歳以降は支援に関われないと聞くことが増えてきた。支援のつながりが一旦ぶちっと切れやすいので、うまく重なり合いながら支援する必要性がある。縦割りの支援の垣根をなくすことは無理でも、低くする必要がある。

○ 障害者就労支援センター

① 障害者就労支援センターについて説明

② 障害者就労支援センターから見る課題

- ・ 特別支援学校卒業後3年間は、出身の支援学校がメインに支援をしていただくため、センターがメインに支援するのは、基本的には3年後になるが、その間、課題が発生したときの学校との連携には課題がある。福祉サービスを学生時代に利用されていた方で、就職をしたためサービスの利用が一旦切れてしまうところが、切れ目になる。
- ・ 特別支援学校・支援学級を経由せず、普通学級、通信制の学校を卒業して、または在学中に相談が来ることがある。学校在学中は、学校の対応が中心となるのでセンターへの登録は行わないが、将来に向けての相談を受けることはある。支援学校と異なり、在学中に企業見学、実習の経験がないこともあり、就職、働くことへのイメージが持ちづらくなっている印象なので、まずはイメージが持てるよう支援を始めている。
- ・ 大学生またはそのご家族からの相談が多くなっている。大学にキャリアセンターなどもあり、そちらで相談を行っていることもあるが、障害者雇用の専門知識が少ない

キャリアセンターの方も多いことから、就労支援センター、支援機関と連携しながら相談を受けていくことがある。学生によっては、卒業論文と求職活動を同時並行することが苦手なので、まず卒業を優先して、卒業してからご相談に来られるケースもあるので、それぞれの経験や判断するところが養っていると大きい。

- 学生から社会人になる際に必要なことは、仕事が行えるかよりも、ソフトスキル、挨拶といったものが、自立に向けた一つになってくる。与えられたものはできてくるが、経験が少ないこともあり、自分で判断する、将来的な先々のイメージが持てないことが多くなってきている。保護者や先生方のフォローが必要になってきて、可能な限りご本人自身で決めていく、選択する経験があると、将来的に仕事をする上ではよい経験になる。
- 就労支援センターでは、就労に向けてのアセスメントで、幼少期から学童期のエピソードを聞かせていただくことがある。アセスメントの中でも大事な内容になるので、学童時期、学校時代からのものをつないでいけたら、そういう支援の形が必要になってくるので、横につながって、情報共有ができればいい。
- 就労支援センターにご相談に来られる方で、仕事を紹介してくださいと来る方がいるが、仕事のあっせんや紹介はしていないので、ご理解いただきたい。

(2) グループワーク

以下、指名されたグループの発表

- 子どもが小さいときに、いろいろなサービス、学校、そして特別支援学校その他事業所、区の出組、様々なところのサポートを、親御さんが知ることが一番大事。知った上で、保護者が子どもにとって最善なところを選択する。本当にその選択がよかったのかどうかということも含めて、再度検討をしてみる。切れ目として課題のある18歳という壁もご理解いただいた上で、今子どもには何が大事かという視点で話ができるとすごくよい。それぞれがつながって、説明をするような機会があると望ましい。
- 出生してから3歳児健診に、小学校入学、中高入学、卒業、大人になってから介護保険を使ってという切れ目と、例えば親御さんが子どもの発達について理解されていないとか、学校だったら先生との連携が難しいとか、先生によって対応に差があるとか、福祉サービスが条件によって利用できるできないという課題が出た。強みや資源としては、文京区では個別支援計画を引き継いでいることや、学校で校内委員会をや

っているので、力を借りてはどうか、福祉でも、ケース会議やサービス担当者会議を開いてはどうかとか、こういった部会とか連絡会が文京区は盛んだと思うので、そこで顔をつないで、支援にも生かしたらどうか。進級の場合に、前の担任から次の担任に情報共有してもらって密に関わるとか、記録したデータを受け継ぐとか、福祉と教育の分野を超えた関わりの中でも、日頃から連絡を取り合い、顔を見える関係で長く関われる間柄を増やすところで、人とつながるところも大事といった意見が出た。

- ・ 保護者がお子さんの状態、特性を受け入れるというところで分かれ目が出るという話も出た。それぞれの制度が確立しているが、ご本人の人生はその後も続いていくところで、切れ目を生んでしまう。居場所や地域で、様々に関わっている団体が非常にたくさんあることは、文京区の大きな強みであるので、一番のスタートである保護者への支援の必要性も念頭に置きながら、関わっている団体が連携して、年齢、制度の切れ目を分断にしないことが大切といった意見が出た。

以下、登壇者よりまとめ

- ・ この場がすごく貴重なので、子どもの切れ目と切れ目を重層的に関わるような支援者や教育者が話し合える場を定期的に持つことが必要。話し合う関係性が持てるところで、子どもの支援についても、いろいろと考えることができると感じた。
- ・ 文京区は、点が多過ぎてつながりづらいが、点がつながったらすごい力があると聞いた。そのとおりだと思って、関係者が一挙に集まる機会があったら、話しやすいし、またこういった会があったらよいと思う。
- ・ ポジティブな意見がたくさん出たと思う。連携していくときに顔が見えないと、学校って、いろんな方たちが来ると結構困っちゃう。知らない人に子どもの情報を渡すわけにいかないし、知っている人だったとしても、学校が持っている情報を、簡単に言えば出すわけにはいかないという状況になったときに、保護者の同意がないといけないし、ある程度顔の見える関係でないといけないので、どうしてもこういう場の中で関係性ができなきゃいけないと思う。今日の方ができてよかったと思う。
- ・ 就職をして、長く継続してお仕事されている方は、定年退職という問題が出てくる。すごく多いケースではないが、会社に勤めている間は、会社が見ているが、退職したら今度は誰が見るのかとなると、地域、支援者、関係機関の方々と一緒に、その方のさらに将来の支援にもつながってくる。

以下、学識経験者よりまとめ

- ・ 職種を超えて集まる機会は本当はないと思うし、プレゼンテーションされたことで、私自身も分野を超えて学ぶことができた。文京区は点がいっぱいあって、待っていてもつながらないので、つなげる必要があると思うし、子どもたちを中心に動くことが、きっと皆さんのお力でできると思うし、ぜひこの会が続けられるように、私はお付き合いできると思うので、子どもたちのために頑張っていきたいと思います。
- ・ 私自身は、文京区の中にある放課後等デイサービスで、子どもたち、親御さんの相談を通して、何となくところどころは知っているつもりではいたが、全体が全然結びついていなくて、全体像が分かっていなかった。この機会ですべて分かったかというのと、全然そうではなく、ますます分からないところは増えているが、こういう形で、機会がなければ知ることもできないし、それぞれの人の一生をどうサポートしていくのか、それぞれの場の中で、必要なときに必要な支援をどうお互いにつくっていけるのかと思ったときに、本当に広い視野が必要で、生涯を通しての視野を持つことが本当に大事。点がいっぱいあるということで、点をより確実にして、点と点をどうやってお互いにつなぐかを意識していかないといけないということを改めて考えさせていただいた。
- ・ 津久井やまゆりの事件があったから、残された利用者の意思決定支援をゼロからやり直した。70代であったとしても、幼少期に戻って本人の物語やエピソードを聞いて、その人が誰なのか、何なのか、何をしようとしたのか、アセスメントをし直した。

重度知的障害の方が多いので、自分で自分のことを言うことが難しいときに、家族、親戚、兄弟、プラス特別支援学校の先生たちを探し出した。その方々から物語を聞いて、エピソードを聞いて、その人の像を再確認して、一緒に意思を考えた。全員分できるわけではないし、全員の先生にも会えなかったが、何人かからエピソードを聞いた。

そのときに分かったのは、過去を振り返るときに、結局、出会う人たちがほとんどいないという現実で、振り返ってもその人のエピソードを聞ける人がいない。療育、教育、福祉、ずっと出会いが、障害者しかいない。この出会いがない流れの中で、自分の存在が何であるかすら分からないことが分かってきた。

幼少期、発達期に、どれだけいろんな人と出会い、自分と違う人との関係性の中で自分という存在をどう作り出していくのかは、この縦割りの制度では無理なので、どうしていくか。文京区は点がたくさんあり、ポテンシャルはすごく高いレベルにあるが、つながっていないことが致命的。顔の見える関係をつくるためには、子どもたちを媒介に

して集まるしかない。これが個別支援計画であり、その人全体の計画になる。1人でも成功体験ができたとき、子どもたちのエンパワーメントやストレングスを我々が感じたときに、関係ができる。福祉も教育も、その関係者の人たちの仕事の誇りや喜びが、子どもたちと一致していくという感じが今日はした。

自立支援協議会に去年初めて子ども支援専門部会をつくって、今日この会ができた。この部会がいろんな意味で、この文京区全体、障害のあるなしにかかわらず、文の京をつくっていかねばいけない。

3 閉会

向井部会長よりまとめ、閉会